

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月29日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520171

研究課題名（和文） 和学系文人の和文作品についての研究

研究課題名（英文） Researches on the sentences in classical Japanese written by the persons of letters who studied Japanese classical literature and culture

研究代表者

長島 弘明（NAGASHIMA HIROAKI）

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号：00138182

研究成果の概要（和文）：江戸時代中期に多く書かれた、和学系の文人たちの手になる和文（擬古文）作品を様々な観点から検討し、次のような新しい知見を得た。和文の種類は、和文小説・随筆・紀行・書簡等、きわめて多様である。また著者の学統や、居住していた地域（江戸か上方か）によって、和文の特色もかなり異なる。江戸における江戸派の和文は自然描写にすぐれ、上方における上田秋成や伴蒿蹊の和文は、人々の日常生活のスケッチに優れている。

研究成果の概要（英文）：The sentences in classical Japanese in the mid-Edo period, written by the persons of letters who studied Japanese classical literature and culture, were examined from various viewpoints, and the following new knowledge was acquired. Essays, accounts of the trip, letters, etc, the kind of sentences in classical Japanese was very various. The sentences in classical Japanese of the Edo regions were different from the Kamigata regions. And also the literary or non-literary works in classical Japanese written by the disciples of Kamono-Mabuchi were different from the works written by the disciples of another classical scholar.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：和文、文人、上田秋成、建部綾足、伴蒿蹊、江戸派

## 1. 研究開始当初の背景

江戸時代中期には、従来の漢学を教養基盤とする文人とは異なって、主に和学（日本古典の研究）を教養基盤とする文人たちが登場し、その和学系の文人たちは、和文（擬古文）を駆使し

た優れた小説や随筆、紀行等を数多く書いている。和文についての研究には、長島弘明『秋成研究』や飯倉洋一『秋成考』等、上田秋成の『藤簍冊子』を中心としたものがあり、また風間誠史『近世和文の世界』のように伴蒿蹊の

諸業績にふれるものもあるが、いまだ数が少なく、研究が進捗しているとは言いがたい。和文がとりあげられる場合も、それが国学や和歌創作を学んだ和学系文人の作品であるという視点を明確に打ち出し、国学研究や和歌創作と同等の意味を持つものとして扱う研究や、和学者グループ内の人間関係に十分に留意しながら和文創作の経緯を辿ろうとする研究は、ほとんどないと言ってよい。

申請者の長島は、建部綾足の多様なスタイルの和文の魅力と、時代的意義を明らかにした論文「綾足の和文」(1989年)以降、一貫してこの時期の和文に関心を抱き続けてきたが、和学系の文人である建部綾足・上田秋成につき、それぞれ『建部綾足全集』『上田秋成全集』を編集し、その文業の網羅的な把握と、内容の克明な検討に努める過程で、和文には従来注目されてきた小説や随筆以外にも、紀行や書簡あるいは国学著述などの様々なジャンルに及ぶこと、従来の近世小説史において和文小説は読本的一种と考えられているが、文体面以外に種々の質的な相違があり、むしろジャンルとしては特立させるべきものであること、和文小説として文人たちが書き残したそれぞれの和文は各人の国学研究の成果の一部として存在するのであり、国学研究と和文は密接な関係があるというよりも、むしろ完全に一体のものとして捉えるべきものであること、国学の学派・師弟関係や交友関係が和文の特質に大きな影響を与えていること、上方の文人と江戸の文人の和文の間には、明らかに質的な相違があること、等々に思い至った。申請者がこれまで積み重ねてきた、和文小説の研究、和文の書誌学的・文献学的研究、文人の伝記研究等を有機的に再統合して、従来の研究では不明であった、諸課題の解決に当

たりたい。

## 2. 研究の目的

3年の研究期間の間に、以下の諸点を明らかにすることを目的とした。

(1) 和文の多様性に注目しつつ和学系文人の種々の和文作品を広く収集し、いまだ十分な整理がなされていない和文作品を、従来の和文小説、和文随筆等の呼称を一旦はずし、それぞれの作品の特性に応じた妥当な名称のもとに分類し直すこと。

(2) 建部綾足、村田春海、石川雅望らの和文小説を、同時代の和漢混淆文体の読本と比較し、構想やテーマにどのような相違があるか明らかにし、読本の中に一括されていた和文小説が、独立した小説ジャンルであることを明らかにすること。

(3) 和学系文人において、国学研究と和文小説の執筆は、関係がありながらも別個の領域の活動であると認識されてきたが、むしろ和文小説や創作的な和文小品は、国学研究の成果の一部であると見なすべきことを、建部綾足の例等を挙げながら明らかにすること。

(4) 同じ賀茂真淵の学統に列なる国学者でも、加藤宇万伎の門下であり、上方の地下歌壇と密接な交渉のあった上田秋成と、村田春海・加藤千蔭・清水浜臣らのいわゆる江戸派、あるいは俳諧出身で俳人との交流が主であった建部綾足とは、明確な質的な相違があることを明らかにすること。

(5) 江戸と上方の文学伝統の相違、

すなわち江戸と上方で主流となってきた小説ジャンルの相違、武家歌壇の影響力が大きい江戸と堂上歌壇の圧倒的な影響下にある上方の歌壇事情の相違、戯作的な滑稽志向の強い江戸とそうでない上方の文学的傾向の相違等々が、両地域の和文の特質に及ぼした影響を考察し、両地域の和文の特質の違いを明らかにすること。

(6) この時期の和文隆盛の要因として、江戸、上方を問わず、国学者あるいは歌人による和文の会が存在したことが挙げられるが、江戸における春海・浜臣らの和文の会と、上方における伴蒿蹊の和文の会の、それぞれの実態やその会の成果としての和文を詳細に検討し、その違いを明らかにすること。

(7) 和文が出版されたものとしては、文人の家集、小説集、随筆集、書簡文範集、あるいは和文小品の選集（『文苑玉露』等）等々、様々な形態の物があるが、それらを網羅的に集成し、出版文化の中で和文集が担っていた意味を明らかにすること。

以上の(1)～(7)の全体について、補足的な説明を加える。

従来の和文研究は、和文小説の場合は読本研究の一部として、それ以外の和文作品は、それぞれの国学者研究の一部として、バラバラに扱われる傾向があった。しかし、小説のような文学的な散文においても日常生活における実用的散文においても、当代の文章として主たる地位を占めていた和漢混淆文に対し、擬古文としての和文は、それらの和漢混淆文とはまったく異なる特色を持った独自の文体であるという点できわめて重要であり、それが和文で書かれた小説か随筆か書簡かという区別よりも、和文全体を一つの大きな展望のもとに見渡す研究が必要である。

本研究は、まず何よりも、個別の和文の分析に終始することなく、和文全体の特質と機能を明らかにすることを主たる目的とする。

もちろん、多岐にわたる和文作品を、多様な視点や方法によって分析することによってのみ、如上の目的を達することができるわけであり、個別の和文作品の検討をおろそかにするわけではない。その際に、従来は閑却視されてきた次の諸点に注意し、和文全体の特質と機能の解明に資するようにしたい。

一つは、ジャンル分類に対する既成観念を疑ってみること。和文の形式にどれほどの多様性があるかについて、和文小説、和文随筆というような従来の呼称ではなお不足かつ不適當であり、内容の吟味を経た、新たな分類・呼称を提示したい。また、従来、読本の特異な例とされていた和文小説を、それとは別のジャンルの小説と考えることによって、他の読本とは異なる部分にこそ、和文小説の本質があることを明らかにできる。

二つには、江戸と上方の地域的な特性を十分考慮に入れること。両地域における国学の学派の相違や、両地域の文学伝統の差が、和文の内実に影響を与えていることは確実であり、和文の質的多様性の理由の一斑を明らかにすることができる。

三つ目には、和文の会や和文の出版など、和文の制作や和文の流通にかかわる周辺事情を考察すること。和文の会の資料の精査により、和文の描いている内容が、作者による任意の選択であるばかりではなく、課せられた題や当座の趣向によるものであることが立証できるであろう。また、和文集の版本の編集意図を探ることにより、当時の和文集に対して、編集者の側が抱い

ていた意識と、享受者の側が期待していたものの双方が明らかになるであろう。

以上、従来の和文研究には欠けていた、本研究の独創的な観点であり、予想される研究成果の一端を述べた。

### 3. 研究の方法

3年間の具体的な研究方法を、年度順に掲げる。(1)(2)等の項目番号は、通し番号とした。

(平成22年度)

研究の初年度に当たる平成22年度は、資料調査と資料収集を中心として、次のように研究を進めた。

(1) 和文作品を網羅的に調査・収集し、どのような種類のものがあるか精査し、それぞれの和文の特徴を厳密に押さえた上で、従来の分類やジャンル名にとらわれない視点で再分類した。特に、従来は一括して随筆に分類されていたものに、紀行から身辺雑記にいたる様々な種類の和文が入っており、それらの検討には十分留意した。

(2) 和文作品のうち、和学系文人の建部綾足・村田春海・石川雅望の作品を中心とした和文小説を調査・整理し、漢学系文人の都賀庭鐘の諸作、同じ和学系文人でありながら厳密な意味での和文体小説は書かなかった上田秋成の諸作と比較検討し、従来は読本に入れられていた和学系文人の和文小説の特質を明らかにした。

(3) 特異な和文作品の書き手である荒木田麗女の諸作は、和学系文人の和文小説と似ていながら、また独自の性格を持っている。麗女の教養基盤についての調査も行いながら、その独自の性格を明らかにした。

(平成23年度)

研究の第2年次に当たる本年度は、初年度の計画のうち、資料の量が多く、引き続き作業が必要な和文資料の調査・収集は継続した。その他、新たに開始した研究は次の通りである。

(4) 江戸派の春海の『琴後集』、千蔭の『うけらが花』、宇万伎に学んだ秋成の『藤簍冊子』『文反古』、堂上歌人の影響の大きい伴蒿蹊の『閑田水草』等の、和学系文人の家集に収められた和文を中心とし、家集にもれているそれ以外の和文作品にも目を配りながら、それらの比較分析を行い、国学の学統・師系による和文の質への影響を検討した。

(5) 江戸と上方の文学的な伝統の相違、具体的には両地域のそれまでの小説のジャンルや作風の相違、武家歌壇主導か堂上歌壇主導かという相違等々を精査し、地域の違いが和文に及ぼす影響を明らかにした。

(平成24年度)

第3年次で最終年に当たる本年は、以下のように研究を進めた。

(6) 江戸と上方の双方の和文の会について調査し、その和文の会の運営の実態や、その会の成果としての和文作品を明らかにした。江戸における和文の会の調査は江戸派の会合を中心とし、上方における和文の会の調査は伴蒿蹊主催の会合を中心とした。

(7) 出版された和文集を網羅的に調査し、創作者・編集者(あるいは書肆)・享受者の、和文に対する意識を明らかにした。

3年間の主な資料調査先は以下の通りである。関係資料が点在しているため調査先は多かったが、なるべく効率的に作業を進めた。

(国内)

国立国会図書館・国立公文書館・国文学研究資料館・東京都立中央図書館・早稲田大学附属図書館・名古屋大学附属図書館・京都大学附属図書館・京都府立総合資料館・京都国立博物館・西福寺・大阪大学付属図書館・大阪府立中之島図書館・柿衛文庫・天理図書館

(国外)

ソウル大学図書館 (韓国)・台湾大学図書館 (台湾)

#### 4. 研究成果

(1) 和文作品およびそれに関連する資料を網羅的に調査した。近世初期の木下長嘯子から近世中・後期の橋千蔭・村田春海・伴蒿蹊・上田秋成らに至る、国学者や歌人の歌文集 (特に歌集の部のみならず文集の部を持つもの) の多くに目を通し、紀行・叙景・書簡等々内容別に分類し、和文の題材あるいは内容が、従来考えられていたよりもはるかに多様であることを明らかにした。

(2) 純粋な和文体の小説を目指した建部綾足や村田春海の小説を、同じく和学系文人でありながら、『春雨物語』に至ってもなお純粋な和文を綴ろうとしなかった上田秋成の小説と比較した。綾足の『本朝水滸伝』や春海の『竺志船物語』が、趣向やストーリーの種を白話小説に借り、ことさらそれを原文の白話と異なる和文に置き換えようとしたのに対し、秋成の『春雨物語』は、典拠としては中国小説は大きな比重を持っておらず、和文を前面に出す必要

がないことを明らかにした。

(3) 上述の(2)と関連するが、従来は『春雨物語』『竺志船物語』『天羽衣』は、和文読本として読本中に分類されることが多いものの、中国小説への依拠が薄く、また文体的にも和文ではない (和文脈が強い話があることはある) 『春雨物語』は、むしろ読本から除外すべきであることを明らかにした。

(4) 上田秋成の『藤篋冊子』収録の和文、またそれ以外の和文を詳細に検討した。秋成の和文の語彙は王朝古典から大きな影響を受けているが、とりわけ秋成自身が校訂に携わった『大和物語』『落窪物語』の用語の影響や、師系にある賀茂真淵・加藤宇万伎の注釈の校訂に秋成が関与している『伊勢物語』『土佐日記』の用語の影響が強い。校訂に際して王朝の和文を繰り返し熟読する経験が、自ずと和文創作の際の自らの文体形成にも影響を与えているゆえと思われる。

(5) 秋成の和文が影響を受けている王朝古典の中でも、とりわけ『源氏物語』からの影響は顕著である。和文のみならず、小説作品の文章にまで『源氏物語』の文章の一節を踏まえた箇所が少なからずあることが指摘できる。これは、秋成が青年時代に懐徳堂で学んだ五井蘭洲と、三十代に本格的に国学を志した際の師である加藤宇万伎の二人が、学問の系統は漢学者出身と賀茂真淵門と分かれるにしても、ともに『源氏物語』研究書を著し (蘭洲は『源語梯』、宇万伎は『雨夜物語だみこと葉』)、『源氏物語』を高く評価する学者であったことの影響と見てよい。

(6) 橘千蔭や村田春海らの江戸の文人の和文に自然描写を主としたものが多いのに比べ、秋成や伴蒿蹊らの上方の文人が創作した和文には、自然描写とともに人事に関わる記述を多く含む。また、上方の和文創作の会と、江戸の和文創作の会（江戸派中心）で、それぞれ出された和文の題を比較してみても、歳時的な題の多い前者に比較して、人事的な題の少ない後者という違いがある。上方の和文には、物語的な文体としての和文という意識がかなり強いように思われる。

(7) 上方の伴蒿蹊主催の和文の会の様子は、蒿蹊自身の『閑田文章』等の内容の精査により、ある程度具体的に推測できる。七十人近くの門人が和文の会に参加していること、また遠方の者は文音（すなわち手紙）によることがあること、会ごとに予め文章の題が決められていて文章を持ち寄る場合とその場で題を選び作る場合があること、同じ題で複数の人間が競作する場合があること、等々である。蒿蹊自身は、和文の文体を、漢文の文体分類になぞらえてさらに細かく分けて考えていたようだが、結果的に残った作品は、門人の作品はもちろん、蒿蹊自身の作品も、様々な和文体を書き分けているとは言い難い。

(8) 江戸の村田春海を中心とした江戸派の和文の会の実態は、春海の『琴後集』や、清水浜臣の『泊泊文集』、残存する和文作品集から、これもある程度推測可能である。やはり漢文の文体に倣ってある程度の文体弁別意識を持っていたことが分かるが、とりわけ消

息（手紙）には関心が深く、消息の文章だけを作る和文の会である消息合の会なども催されている。

(9) 近世初期の木下長嘯子の『挙白集』あたりから幕末に至るまで、和文の作品を収める家集等を広く調査した。その結果、和文が盛んに作られ、また家集に入ることが多くなるのは十八世紀後半、国学の興隆によって漢に対する和の意識が昂揚した時期以降のことであることを確認した。それまでも漢文に対する日本の文章であることを意識するものはあったが、それは和文ではなく、十七世紀後半から十八世紀にかけて蕉門等で盛んに作られた俳文であった。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

- ① 長島弘明、講演『雨月物語』の多義性について、京都語文、査読無、19号、2012年、44-58頁
- ② 長島弘明、月溪宛秋成書簡・『享和三年寿算歌』紹介、東京大学国文学論集、査読有、6号、2011年、102-115頁
- ③ 長島弘明、講演 断簡零墨の中の秋成一『鶉居帖』について一、ビブリア、査読無、134号、2010年、3-27頁

〔学会発表〕（計4件）

- ① 長島弘明、『雨月物語』の享受、東京大学・コロンビア大学合同国際シンポジウム「日本文学に関する研究と教育の国際化」、2013年3月29日、コロンビア大学（アメリカ）
- ② 長島弘明、『雨月物語』の多義性について、佛教大学国語国文学会、2011年11月26日、佛教大学
- ③ 長島弘明、上田秋成の画賛、京都国立博物館夏期講座「文学と美術」、2010年7月29日、ハートピア京都
- ④ 長島弘明、断簡零墨の中の秋成一『鶉居帖』の楽しみ一、2010年5月29日、天

理ギャラリー

〔図書〕（計3件）

①長島弘明（共著）、東京大学国文学研究室、東京大学・コロンビア大学合同国際シンポジウム「日本文学に関する研究と教育の国際化」予稿集、2012年、32-47頁

②長島弘明（共著）、日本近世文学会、上田秋成 没後二〇〇年記念、2010年、全104頁（全体にわたる共同執筆）

③長島弘明（共著）、京都国立博物館、特別展観 没後200年記念 上田秋成、2010年、全32頁（全体にわたる共同執筆）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長島 弘明 (NAGASHIMA HIROAKI)  
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授  
研究者番号：00138182

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：